2014年（平成26年）5月17日（土曜日）　東京新聞

ロシアで伝えた 勝野の思い

長女の明子さん モスクワで講演 きょう都内で報告

「日本のソルジェニーツィン」「スターリン体制告発の先駆者」と呼ばれる作家、勝野金政（一九〇一～八四年）＝写真＝が旧ソ連の強制収容所から奇跡的に日本へ生還して今年で八十年。勝野の長女、稲田明子さん（七三）＝神奈川県鎌倉市＝は先月末、ロシアを訪問し、勝野の生きざまや思想について初めて講演した。帰国報告会が十七日、早稲田大学（東京都新宿区）で行われる。（門田直人）

講演会は、モスクワの在外ロシア人会館＝通称ソルジェニーツィン館＝で、勝野没後三十年を記念した写真・遺品展の一環として開かれた。

明子さんはモスクワ市民らに、旧ソ連崩壊後に公開された公文書館のファイルで、若き勝野の苦闘の人生を知った驚きを語った。参加者からは「日本人にも収容所の体験者がいたことを知って驚いた」と言われ、想像以上の関心の高さだった。

講演後、明子さんは「収容所という極限状態でも、温かい気持ちを失わなかったロシア人らのおかげで、生還できた父親の思いを伝えたかった」と訪ロの目的を説明した。父の死後見つかった遺書につづられていた「ヒューマニズム・インターナショナル（国際人道主義）よ永久に」との願いも紹介したかったという。

勝野に関するロシア人向けの文書作成は、渡辺えりを東京外国語大学非常勤講師が担当。講演の内容はロシアのラジオ局「ロシアの声」のホームページに掲載され、音声でも聞くことができる。

帰国報告会では、勝野の足跡を調査し、明子さんとともにモスクワで講演した加藤哲郎一橋大名誉教授も出席する。

ソルジェニーツィン館での勝野金政展で講演した稲田明子さんと同展覧会担当のナターリヤ・クレバリナさん＝モスクワで（明子さん提供）